

用意周到、手抜きなし

(ヨハネ一四・一六―一八、二五―二七)

「先生は教区長としてどのようなようにやっていかれるおつもりですか」という問いにこう答えた。「前任のI先生のように細やかなことはできないでしょう。ご承知の通り、結構ずぼらで出たところ勝負なもので。」勿論二度に渡る留学や様々なところで経験を経て少しはましにはなったものの性格と言つのはそうそう変わらない。基本は「まつ、何とかなるだろ」型である。そんな私が智子師を見るとまったく脱帽である。一つ一つが細かく、丁寧いつも用意周到なのだ。段取り力MAXである。

一、共におられる聖霊
ここで「助け主」と訳されたことばは原語では「パレクレートス」といい、その動詞形は「バラカレオー」と言い「励ます」「慰める」「誰かのために弁護する」などの意味がある。もつとも励ましも慰めも弁護も広義では「助け」であろうから、助け主という訳は適役であろう。もう一つ注目したいのは「もうひとりの」という言葉である。つまりイエスが願った助け主なる聖霊は一人目の助け主であるイエス自身との類似性があることを示している。「食する暇も打ち忘れて、虐げられし人をたずね、友無き者の友となりて、こころくださいしこの人を見よ」の賛美歌を見るまでもなく、イエスがその預言的な名、「インマヌエル」の通り、人のただなかに、人とともに生きたお方であることは明らかである。そのイエスに代わってこられる助け主なる聖霊も同じように私たちと共にいて、常に助け、励まし、慰め、時には私たちのために弁護してください。そう考えると私たちが助け主なる聖霊を意識しないというのはなんともモッタナイ。三位一体とは言うが、父なる神、子なるキリストに比して聖霊の言及が少ないのは実に残念なことである。イエスが自ら願われたもう一人の助け主なる聖霊を

歓迎し、助けていただくとき、私たちは決して孤児となることはないのだ。

二、思い起こさせる聖霊

どの福音書を読んでも思うことだが弟子たちは驚くほどにイエスのことばを理解できていない。それはこの前後でも同じであつて洗足におけるペテロにしても、直前の段落におけるピリポやトマスにしてもかなり頓珍漢なことを言っている。もつともイエスのことば、殊にメシアの秘密に属することのすべてが理解されればイエスが十字架に掛かるのは困難になつてしまふという意味ではこれはこれで仕方がないともいえる。実際イエスはペテロに対して「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになりませう(一三・七)」といい、弟子達にも「わたしがこれらのことを話したのは、その時が来れば、わたしがそれについて話したことをあなたがたが思い出すためです(一六・四)」と語っている。しかしイエスは彼らが思い起こすことができるように教えただけではなく、もう一人の助け主である聖霊をお与えになり、私たちにイエスの語ったことを思い起こさせてくださるのである。知識が多くてもそれを取り出すことが出来なければ意味がない。真理を知ったことはあつても、それが脳の引き出しの

奥に取り出されずにしまつてあつたのでは用をなさない。しかし真理の御霊は私たちの心に働いて、道であり、真理であり命であるキリストの言葉と行いを思い起こさせ、心に平安を保つてくださる。我らの主はかように用意周到なお方なのだ。

* * *

旧聞に属するが「スキリ」。「サンジヤボ」そして「ほんまでつか」TVなど民放各社の番組で引つ張りだつた流通ジャーナリスト、金子哲雄さんの死は用意周到という形容がふさわしいものだった。闘病を隠すため十三キロに及ぶダイエットをしたといつて仕事を続行、死の直前には自らの葬儀で出す弁当のメニューを決めていたという。また自身で書いた会葬御礼には第二の現場(＝来世)での抱負、葬儀社や僧侶への感謝が爽やかに書かれていた。また没後出版された『僕の死に方』は「終活」の必読書となつていくと聞く。実に用意周到だ。だが人間にできるのはここまで。私たちの主イエスは信じるすべてのものが孤児にならず、平安を保ち、真理に生きられるよう、聖霊降臨を約束して刑場へ向かわれた。今イエスを信じよう。イエスは聖霊によつて、真理と平安、いのちと希望を備えていて下さる。